

はじめに

本書のメッセージはシンプルだ。
「子どもは大人につきあっている」
それだけである。

「そうですか、納得しました」という読者はいないだろう。「仕事に明け暮れた後の貴重な休日を費やして子どもが楽しみにしていた遊園地につきあうのは大人の方だ」とか、「終わらない夏休みの宿題につきあって夜の8時に問題を必死になって解くのは大人の方だ」とか。そういう経験をしたことのある大人は、「こちらこそ子どもにつきあっているのだ」と言いたくなるだろう。読者のその気持ちは、よく分かる。

しかし、常識にそぐうことを言ってもつまらない。だからといって荒唐無稽なことを言っているわけでもない。

子どもにつきあっている大人は、おそらく広い意味で「子育て」をしている人たちだろう。家庭で、養護施設で、保育園で、幼稚園で、学校で、地域で、大人は子どもを育てている。人間という種はそうして綿々と世代を重ねてきた。また、社会や文化は育てた子どもによって維持継承され、人間の歴史がいまもなお、そしてこれからも積み重ねられていく。言うまでもなく子育てとは人類の重要な営みである。

大人はもちろんのこと、子どももまた、この子育てという営みにとって不可欠な当事者である。では、子どもの視点から子育てを見てみると、それはどのように映るのだろうか。子どもは「いま自分は子育てされている」と思っているのだろうか。

そう考えると、「あれ？ どうだろう」と思えてくる。むしろ子どもは、日々を気ままに生き、たまに大人と遊んで「あげている」だけなのかもしれない。自分のあざかり知らない理由で日々せわしなく動き回るこの目の前の大きな人は、ときに笑い、ときに怒り、ときに自分を背負ってどこかに移動し、ときに自分の口においしいものを運んでくれる。自分に対してそのようにしてくれる理由は分からぬけれども、どうもこの人の行動にある程度合わせてあげた方が暮らしやすそうだ。もちろん自分には自分なりにやりたいことが別にあるのだけれど、つきあってあげよう。

そんなことを当の子どもが実際に考えているかどうかは、もちろん、第三者には分からぬ（本人も分かっていないかもしれない）。しかし、想像は科学を牽引する。「子どもは大人につきあっている」というこのアイディアを補強する素材を探し、そこから帰結することを論じてみよう。認知科学や発達心理学の掲げる研究課題の範囲が広がるかもしれない。

認知科学の重要な貢献の一つは、一見すると「おろか」に見える人間の行動も、実は「かしこさ」の現れとして理解できることを示した点にある。たとえば、ヒューリスティックと呼ばれる思考のプロセスに関する研究は、合理的思考の難しさという人間の弱点を暴いた。一方で、こうした思考プロセスがあることによって、人間は効率的に物を考えたり、他の創造的な思考に注力したりできる。おろかだが、かしこい。かしこいが、おろかだ。こうした矛盾する存在として人間を描くのが認知科学だ、と筆者は思っている。

筆者の関心は、子どもが大人とともに組織するさまざまな社会的場面において観察される子どもの言語的・非言語的行動の発達過程にある。認知科学者は、研究対象においてかしこさを見るわけだが、そのような態度で「子ども」なる存在を対象として眺めるなら、かれらはいかなる意味で知的存在と言えるのか。

確かに、子どものすることと大人のすることは、ある面で見れば、まったく異なる。たとえば、ことばだ。2歳と18歳の言語行動を比べれば、18歳の方が洗練されているように感じられる。しかし認知科学者は、2歳の子どもにも18歳とは異なる独自のかしこさを見て、知性の中身を言い当てようとする。

本書は、大人と子どもがともに暮らす生活の場に足を踏み入れ、そこで起こる出来事とそこでの子どものふるまいについて、認知科学のある立場に立脚して分析することを目指す。この課題には、子どものかしこさの中身を具体的に示すことも含まれる。それは、必ずしも、大人がイメージするものとは限らない。乳児が示すかしこさは身体的なものかもしれないし、幼児のかしこさは大人の発想の斜め上を行くものかもしれない。本書は、私たちの社会が子育てのために組織した家庭や保育園といった諸制度における人々の生活場面の観察を通して、子どもの言語的・非言語的行動の中に見いだされるかしこさの内実を明らかにする。

日常生活において、乳幼児期の子どもは、大人とともにいることを必然とする。1人では生きていけないからだ。家庭や保育園にいる大人は、子どもに対し、ご飯をあげ、服を着せ、風呂に入れ、散歩に連れ出す。これらの諸行為は全体として子育てという営みを成り立たせる。ここに列挙された行為からしても、「子育て」ということばには、子どもが大人から一方的に教育されたり管理されたりするイメージがつきまとっているように感じられる。「子育て」という営みの主語は大人であり、子どもではない。この背後には、大人を主、子どもを従とする見方が潜む。

すると、子どもの呈するかしこさも、大人が支援してはじめて成立するもののように感じられる。子どもがかしこくふるまえるのは大人のおかげ、あるいは、かしこくしてくれるのは大人のおかげ、という具合に。たとえ自由放任に子育てがなされたとしても、そう

するかどうかを決めるのは結局のところ大人の一存だ。大人と子どもの関係はかくも非対称的だ、そう思われている。果たしてそうだろうか。

子育ては大人と子どもの相互行為として実現する。大人がかしこく見えるのは、相互行為を通して、子どものかしこさに助けられているからではないか。いくら大人が子どもと相互行為をしようにも、子どもが協力しなければそれは成立しない。子どもは大人のそばに「つきあって」「いてあげている」のかもしれない。そういう可能性をはじめから排除するのではなく、真剣に取り上げてはじめて見えてくるものを探ってみたい。十分にかしこい2人がかしこくやりとりをするのではなく、中途半端に動く2人が協働的なやりとりをどうにかこうにか進める過程にかしこさが垣間見える、そのように考えられないか。

こうした発想は新しいものではない。かつてジェローム・ブルナーが指摘したように、子どもと大人の相互行為は発達するシステムとみなすことができる。それは、時間経過にともなって相互行為の組織化に果たす大人の役割と子どもの役割が関連し合いながら変化するシステムである。このとき、かしこさや有能さと私たちが呼ぶものは、そのシステムが全体として発揮する機能の一つかもしれない。この考え方は古くはヴィゴツキーやレオンチエフなどソヴィエト心理学に遡ることができるし、80年代以降認知科学の主要なパースペクティブとして定着した状況的認知論（situated cognition）の基本的な考え方でもある。人間のかしこさとは、その状況において、状況の中に埋め込まれたさまざまな人工物や人々との緊密な連携によって組織されるシステムを通して現れるものである。本書の背後にはこの考え方がある。

本書を読んでもらいたいのは、第一に、子どもにかかわる大人、すなわち、保育園や養護施設、幼稚園や学校、塾やさまざまな習い

事、クラブなどで子どもとかかわるすべての大人である。養育者は言うまでもない。第二に、子どもという存在に関心をもって勉強をしている大学生、大学院生である。第三に、人々のコミュニケーションや子どもの認知的な有能さに関心のある研究者である。

まっさきに教育にたずさわる人々を挙げたのには、理由がある。子どもをしつけたり、教育したりするのは大人の役割である、というのはそうした人々の常識だろう。しかしそのとき、おろかな子どもをかしこくしてやろう、などと思い上がってはいけない。そもそも、しつけや教育というコミュニケーションが成立するためには子どもがそこに「適切に」参加していかなければならない。コミュニケーションの場への参加者として、子どもと大人は平等なのである。

本書は7章から構成される。1, 2, 4章は子どもの生活という具体的な文脈の中でのかれらの認知発達を分析する枠組みについて書かれている。3, 5, 6章では筆者自身による調査に基づき、家庭や保育園といった場での出来事やコミュニケーションの様子が記述される。最後の7章はまとめと展望にあてられる。

書き手は読み手の読み方を強制できない。どこからでも好きな順序で読み始めていただきたい。ただし、具体的な分析の意味を知るには、やはり、1, 2, 4章の理論編をふまえておく必要はあるだろう。

第1章で議論するのは、大人と子どもが協働して一つの出来事を作り出す際の子どもの有能さである。大人は、大人を相手にして子育てをすることはできない（それは端的に「大人育て」である）。その意味で、子育てには子どもの協力が欠かせない。子どももまた、子どもなりのやり方で大人との協働に参加している。しかし大人には子どものそうした協力が見えてこない。ここには、大人にとっての「死角」がある。それを克服するためには、両者の具体的で微細な身体の動きに注目するのがよいだろう。

第2章では、大人と子どもの協働活動を分析する方法論について論じる。第1章で述べられるように、大人と子どもの日常的なコミュニケーションがそれぞれの微視的な行動によっていかにして成し遂げられているのかを分析するための方法論が必要となる。本書では、社会学に由来する「会話分析」という方法論に活路を見いだす。

第3章で論じるのは、家庭という最初の社会化の場で展開される養育者と子どもの間の会話である。それは、大人にとっては子育て活動を組織する主要な手段であるとともに、子どもが大人とともにを行う最初期の協働である。そこで会話を眺めてみると、大人たちの会話の中に入り込もうとする子どももいれば、そのそばで黙り続ける子どももいる。子どもの有能さは話し手となるときにだけ發揮されるのではない。周囲の人々の発話を黙って聞く子どもにも有能さを見いだすことができる。

会話分析という方法論は、人々が相互行為する局所的な場面で起こる出来事の記述に強みを發揮する。しかしながら、子どもがある場面においてある特定の行動を起こした理由を理解するには、個々の行動だけを見ていては分からぬ部分が残る。そこで第4章では、精神発達への文化歴史的アプローチと呼ばれる方法論を導入し、子どもの日常生活に起こる出来事を、子ども自身の視点から記述するための方法論を論じる。さらに、それを用いて、現代の家族制度を組織する実践としての家族会話を理解する道を開く。

第5章と第6章で扱うのは保育園という制度の中での大人や子どもたちのふるまいである。保育園とは家庭的な機能（子どもの保護）をもちつつ、学校的な機能（社会集団における生活を通しての子どもの教育）も備えた特殊な制度である。こうした制度において大人、すなわち保育者たちは、子どもたちを対象とした保育実践を行う。

第5章では家庭と保育園という異なる制度をまたいで生活する子どもを身体の水準でコントロールしようとする保育実践と、その実践に多様な行為で応答する子どもの姿を描く。具体的には、保育園のさまざまなイベントと連動して子どもたちが集団で一斉に声を出す「一斉発話」と呼ぶ出来を取り上げる。私たちにとってもなじみのある出来事だが、これもまた大人と子どもの協働で成立していた。家庭での会話と同様に、子どもは微細な行為の調整を通してそこに参加し、全体としての一斉発話を達成させていたのである。

第6章では保育実践の成立機制に子どもたちの行う「遊び」が重要な形で寄与していたことを示す。大人による活動で想定されていない、そこからは逸脱的な子どもたちのふるまいが、設定保育と勝手な遊びという二つの異質な活動を同時に成立させていた。保育という制度は単純なものではないし、また、そこに参加する子どもたちも単純に保育制度に適応しているわけではない。子どもたちは大人の活動につきあいながら、しかし、自分たちの生活領域をのびのびと作り出していたのである。

第7章は本書のまとめである。子育てという活動を文化歴史的アプローチによって記述することがもつ認知科学的な意義について、また、「つきあう」という概念にこめられたインプリケーションについて論じる。最終的に、本書の冒頭で読者に投げかけた「子どもにとって『子育て』とは何か」という問いに答えていく。現時点でのそれに対する回答は単純なものとなる。

ただしそこに行き着くまでに大人が直面する実践的な問題もある。それについて、ランシェールの「不和」に関するアイディアに依拠して一つの解決策を提起する。これまでの心理学や認知科学が対象としてきたのは、大人にとって扱いやすい子どもの側面ではなかったか。子どもには子どもの事情や欲望があるのであり、大人の意に沿わないことが多くあるはずだ。きちんと整序された理性の世

界からはこぼれ落ちてしまう側面を子どもの姿から理解する道筋を作ってみたい。

本書は書き下ろしだが、いくつかの章はすでに発表された筆者の論文を下敷きとして大幅に加筆修正したものである。章と論文の対応関係は次のようになる。

第3章

- ・伊藤崇 (2015). 幼児による家族内会話への傍参与の協同的達成. 『認知科学』, **22**, 138-150.

第5章

- ・伊藤崇 (2001). 書き起こせない発話者：一斉発話中の一人ひとりの声. 『日本認知科学会「教育環境のデザイン」研究分科会研究報告』, **8**(1), 20-26.
- ・Ito, T. (2004). Children's synchronization of utterance in the Japanese preschool. *Annual Report (Research and Clinical Center for Child Development, Hokkaido University)*, **26**, 45-55.

第6章

- ・伊藤崇 (2011). 集団保育における年少児の着席行動の時系列分析：「お誕生会」の準備過程を対象として. 『発達心理学研究』, **22**, 63-74.
- ・伊藤崇 (2014). 保育所での活動間移行過程における子どもたちによる呼びかけ行動の分析. 『子ども発達臨床研究』, **5**, 1-11.

いずれも筆者の若かりしどきに行った調査を元に書かれた論文である。時間の経ったそのような研究を「最新の成果」とうそぶくつもりはない。ただ、調査の対象は家庭や保育園といった今でも変わらずに存在する子育ての場で、おそらく今でも変わらずに行われている日々の実践である。だから、その成果は現代においても通じるはずだ。

しばらくのほど、本書におつきあいいただければ幸いである。